



上から2mm厚のヌメ革、白いのが2mm厚のボール芯、桐の木枠。それぞれ木枠と革、ボール芯と革を重ねて一緒に縫い合わされます。



木枠のパーツ。豊岡鞆アタッシュケース・クラシックのもの。右が本体、左がフタ部分に切り分けられています。棒状の物は陰胴という密閉性を高め、フタのズレを防ぎ開口部分まわりの段差になるもの。



木枠に革を貼り、金具を取付けた状態。この後、内装作業をして仕上がります。

Trunk トランクは元々の意味が「木の幹」を表す言葉で、昔々は食料の貯蔵用などで、適当な長さにした木の幹の内部をくり抜いて使われていました。文明の発達により鉄製の道具が登場すると箱状に作られるようになり、19世紀に入り人々の移動が増えるにつれ馬車や客船での旅、自動車での旅にあうよう使い易く改良されてきました。

現代では軽く丈夫にということで、化学素材や軽金属（ポリカーボネイトやジュラルミンなど）が一般的ですが、匠乃トランクでは、往年の素材や技法を生かしたトランクを紹介します。



匠乃トランクで作られる物は、木枠と革、もしくはボール芯と革の組合せが中心です。どちらもそれぞれに素材の特徴があり、使用する状況や目的に応じて、最適な素材を提案しています。

### 素材の特徴

**ボール芯**：柔軟性があり、多少内容物がかさばっても本体が歪んでフタを閉められる。長時間重たい物を乗せたり、濡れたまま形を整えなかったりした場合、変形しやすい。

**木 枠**：形状が定まっており、変形させてはいけないもの（書類など）や精密機器、楽器などを保護することが出来る。形状が定まっているため（つまり固い）、内容物が少しでも多いとフタが閉まらない。

以上のような特徴があるため、次ページ（15ページ）の分類をご覧頂いても旅行用途のものにはボール芯、ビジネス用のアタッシュケースには木枠が使われることが多いです。また、次ページ下段のSpecial特殊用途のものでは、大型の物が多いため、剛性を高める目的で木枠が多用されています。

製法自体は、ボール芯も木枠も革と一緒に縫い込まれますので強度は高くなります。重量については若干木枠の方が重たくなる傾向がありますが、革の厚みを1.5mm程に薄く削いたり、木枠の場合板の中心部分に穴をあけたりすると軽量化出来ます（その分、強度は落ちます）。

素材を選ぶ場合は、使用目的、使用環境を考慮の上お選びいただけます。



左) 桐枠の拡大  
枠の辺に沿って段差が付けられています。これは角に付けられる革補強が浮いて引っ掛らないよう革が重なる部分につけられています。  
右上) フタと本体の合わせ部分。内側に飛出しているのが陰胴。陰胴含めて全体が1枚の革で捲かれるので、密閉性が高まります。  
右下) 陰胴部分。陰胴の一つ一つも面取りされ、部分的に鋸かれ段差が付けられます。

